

# 畜犬談

—伊馬鵜平君に与える—

太宰治

青空文庫



私は、犬については自信がある。いつの日か、かならず喰くいつかれるであろうという自信である。私は、きつと噛かまれるにちがいない。自信があるのである。よくぞ、きようまで喰くいつかれもせず無事に過してきたものだと思議な気さえしているのである。諸君、犬は猛獸である。馬を斃たおし、たまさかには獅子ししと戦つてさえこれを征服するとかいうではないか。さもありませんと私はひとり淋しゆこしく首肯しゆかうしているのだ。あの犬の、鋭きばい牙を見るがよい。ただものではない。いまは、あのように街路で無心のふうを装い、とるに足らぬもののごとくみずから卑下して、芥箱ごみばこを覗のぞきまわつたりなどしてみせているが、もともと馬を斃たおすほどの猛獸であ

る。いつなんどき、怒り狂い、その本性を暴露するか、わかつたものではない。犬はかならず鎖に固くしばりつけておくべきである。少しの油断もあつてはならぬ。世の多くの飼い主は、みずから恐ろしき猛獣を養い、これに日々わずかの残飯さんぼんを与えているという理由だけにて、まったくこの猛獣に心をゆるし、エスやエスやなど、気楽に呼んで、さながら家族の一員のごとく身边に近づかしめ、三歳のわが愛子をして、その猛獣の耳をぐいと引っぱらせて大笑いしている図にいたっては、戦慄せんりつ、眼を蓋おほわざるを得ないのである。不意に、わんといつて喰いついたら、どうする気だろう。気をつけなければならぬ。飼い主でさえ、噛みつかれぬとは保証できがたい猛獣を、（飼い主だから、絶対に喰いつか

れぬということは愚かな気のいい迷信にすぎない。あの恐ろしい牙のある以上、かならず噛む。けつして噛まないということは、科学的に証明できるはずはないのである。その猛獣を、放し飼いにして、往来をうろうろ徘徊はいかいさせておくとは、どんなものであろうか。昨年しねんの晩秋、私の友人が、ついにこれの被害を受けた。

いたましい犠牲者である。友人の話によると、友人は何もせず横丁を懐ふところ手してぶらぶら歩いていると、犬が道路上にちやんと坐っていた。友人は、やはり何もせず、その犬の傍を通った。犬はその時、いやな横目を使ったという。何事もなく通りすぎた、とたん、わんといつて右の脚あしに喰いついたという。災難である。一瞬のことである。友人は、呆然ぼうぜんじしつ自失したという。ややあつて、

くやし涙が沸いて出た。さもありません、と私は、やはり淋しく首肯している。そうなつてしまつたら、ほんとうに、どうしようもないではないか。友人は、痛む脚をひきずつて病院へ行き手当を受けた。それから二十一日間、病院へ通つたのである。三週間である。脚の傷がなおつても、体内に恐水病といういまわしい病気の毒が、あるいは注入されてあるかもしれぬという懸念けねんから、その防毒の注射をしてもらわなければならぬのである。飼い主に談判するなど、その友人の弱気をもつてしては、とてもできぬことである。じつと堪こたえて、おのれの不運に溜息ためいきついているだけなのである。しかも、注射代などけつして安いものではなく、そのような余分の貯たくわえは失礼ながら友人にあるはずもなく、いずれは

苦しい算段をしたにちがいないので、とにかくこれは、ひどい災難である。大災難である。また、うっかり注射でも怠おこたらうものなら、恐水病といつて、発熱悩乱の苦しみあつて、果ては貌かおが犬に似てきて、四つ這ばいになり、ただわんわんと吠ゆるばかりだといふ、そんな凄せい惨さんな病気になるかもしれないということなのである。注射を受けながらの、友人の憂慮、不安は、どんなだったろう。友人は苦勞人で、ちゃんとできた人であるから、醜くとり乱すこともなく、三七、二十一日病院に通い、注射を受けて、いまは元氣に立ち働いているが、もしこれが私だったら、その犬、生かしておかないだろう。私は、人の三倍も四倍も復讐ふくしゅう心の強い男なのであるから、また、そうなると人の五倍も六倍も残忍性

を發揮してしまふ男なのであるから、たちどころにその犬の頭ずがい蓋骨こつを、めちやめちやに粉砕ふんさいし、眼玉をくり抜き、ぐしやぐしやに噛んで、べつと吐き捨て、それでも足りずに近所近辺の飼いい犬ことごとく毒殺してしまふであらう。こちらが何もせぬのに、突然わんといつて噛みつくとはなんという無礼、狂暴の仕草しぐさであらう。いかに畜生といえども許しがたい。畜生ふびんのゆえをもつて、人はこれを甘やかしているからいけないのだ。容赦ようしやなく酷刑こっけいに処すべきである。昨秋、友人の遭難を聞いて、私の畜犬に対する日ごろの憎悪は、その極点に達した。青い焰ほのおが燃え上るほどの、思いつめたる憎悪である。

ことしの正月、山梨県、甲府こうふのまちはずれに八畳、三畳、一畳



という草庵そうあんを借り、こつそり隠れるように住みこみ、下手な小説あくせく書きすすめていたのであるが、この甲府のまち、どこへ行つても犬がいる。おびただしいのである。往来に、あるいはたらず佇み、あるいはながながと寝そべり、あるいは疾駆しゅくし、あるいは牙を光らせて吠えたて、ちよつとした空地でもあるとかならずそこは野犬の巢のごとく、組んずほぐれつ格闘の稽古にふけり、夜など無人の街路を風のごとく、野盗のごとくぞろぞろ大群をなして縦横に駆け廻っている。甲府の家ごと、家ごと、少くとも二匹くらいずつ養っているのではないかと思われるほどに、おびただしい数である。山梨県は、もともと甲斐か犬の産地として知られているようであるが、街頭で見かける犬の姿は、けっしてそんな純

血種のものではない。赤いムク犬が最も多い。探るところなきあさはかな駄犬ばかりである。もとより私は畜犬に対しては含むところがあり、また友人の遭難以来いつそう嫌悪けんおの念を増し、警戒おさおさ怠るものではなかつたのであるが、こんなに犬がうようよいいて、どこの横丁にでも跳ちようりよう梁し、あるいはとぐろを巻いて悠然と寝ているのでは、とても用心しきれるものでなかつた。私はじつに苦心をした。できることなら、すね当あて、こて当、かぶとをかぶつて街を歩きたく思つたのである。けれども、そのような姿は、いかにも異様であり、風紀上からいっても、けつして許されるものではないのだから、私は別の手段をとらなければならぬ。私は、まじめに、真剣に、対策を考えた。私はまず犬の心理を研

究した。人間については、私もいささか心得があり、たまには的確に、あやまたず指定できたことなどもあったのであるが、犬の心理は、なかなかむずかしい。人の言葉が、犬と人との感情交流にどれだけ役立つものか、それが第一の難問である。言葉が役に立たぬとすれば、お互いの素振り、表情を読み取るよりほかにない。しつぽの動きなどは、重大である。けれども、この、しつぽの動きも、注意して見ているとなかなか複雑で、容易に読みきれぬものではない。私は、ほとんど絶望した。そうして、はなはだ拙劣せつれつな、無能きわまる一法を案出した。あわれな窮余の一策である。私は、とにかく、犬に出逢うと、満面に微笑を湛たえて、いささかも害心のないことを示すことにした。夜は、その微笑が

見えないかもしれないから、無邪気に童謡を口ずさみ、やさしい人間であることを知らせようと努めた。これらは、多少、効果があつたような気がする。犬は私には、いまだ飛びかかつてこない。けれどもあくまで油断は禁物である。犬の傍を通る時は、どんなに恐ろしくても、絶対に走つてはならぬ。にこにこ卑しいついでしょ追従うわら笑いを浮べて、無心そうに首を振り、ゆっくり、ゆっくり、内心、背中に毛虫が十匹這はつているような窒ちっそく息せんばかりの悪寒おかんにやられながらも、ゆっくりゆっくり通るのである。つくづく自身の卑屈がいやになる。泣きたいほどの自己嫌悪を覚えるのであるが、これを行わないと、たちまち噛みつかれるような気がして、私は、あらゆる犬にあわれな挨拶を試みる。髪をあまりに長く伸

ばしている、あるいはウロンの者として吠えられるかもしれないから、あれほどいやだった床屋へも精出してゆくことにした。ステッキなど持つて歩くと、犬のほうで威嚇いかくの武器と勘かんちがいで、反抗心を起すようなことがあつてはならぬから、ステッキは永遠に廃棄はいきすることにした。犬の心理を計りかねて、ただ行き当りばったり、むやみやたらに御機嫌とつているうちに、ここに意外の現象が現われた。私は、犬に好かれてしまったのである。尾を振つて、ぞろぞろ後についてくる。私は、じだんだ踏んだ。じつに皮肉である。かねがね私の、こころよからず思い、また最近にいたつては憎悪の極点にまで達している、その当の畜犬に好かれるくらいならば、いつそ私は駱駝らくだに慕われたいほどである。ど

んな悪女にでも、好かれて気持の悪いはずはない、というのそれは浅薄せんぱくの想定である。プライドが、虫が、どうしてもそれを許容できない場合がある。堪かん忍にんならぬのである。私は、犬をきらいなのである。早くからその狂暴の猛獣性を看破し、こころよからず思っているのである。たかだか日に一度や二度の残飯の投与にあずからんがために、友を売り、妻を離別し、おのれの身ひとつ、家の軒下に横たえ、忠義顔して、かつての友に吠え、兄弟父母をも、けろりと忘却し、ただひたすらに飼主の顔色を伺い、阿諛あゆ追つい従しようてんとして恥じず、ぶたれても、きやんといい尻尾しつぽまいて閉口してみせて、家人を笑わせ、その精神の卑劣、醜怪、犬畜生とはよくもいった。日に十里を楽々と走破しうる健脚を有

し、獅子をも斃すたお白光銳利の牙きばを持ちながら、懶惰無頼らんだぶらいの腐りは  
 てたいやしい根性をはばからず發揮し、一片の矜きようじ持なく、ても  
 なく人間界に屈服し、隸れいぞく属し、同族互いに敵視して、顔つきあ  
 わせると吠えあい、噛みあい、もって人間の御機嫌をとり結ぼう  
 と努めている。雀を見よ。何ひとつ武器を持たぬ纖弱のしろうきん小禽  
 ながら、自由を確保し、人間界とはまったく別個の小社会を営み、  
 同類相親しみ、欣きんぜん然日々の貧しい生活を歌い楽しんでいるでは  
 ないか。思えば、思うほど、犬は不潔だ。犬はいやだ。なんだか  
 自分に似ているところさえあるような気がして、いよいよ、いや  
 だ。たまらないのである。その犬が、私を特に好んで、尾を振つ  
 て親愛の情を表明してくるに及んでは、狼ろうばい狼とも、無念とも、

なんとも、いいようがない。あまりに犬の猛獸性を畏敬し、買いかぶり節度もなく媚びしょう笑を撒まきちらして歩いたゆえ、犬は、かえつて知己を得たものと誤解し、私を組みしやすしとみてとつて、このような情ない結果に立ちいたつたのであろうが、何事によらず、ものには節度が大切である。私は、いまだに、どうも、節度を知らぬ。

早春のこと。夕食の少しまえに、私はすぐ近くの四十九聯隊の練兵場へ散歩に出て、二、三の犬が私のあとについてきて、いまにも踵かかとをがぶりとやられはせぬかと生きた気もせず、けれども毎度のことであり、観念して無心平生を装い、ぱつと脱兎だつとのごとく逃げたい衝動を懸命に抑え、抑え、ぶらりぶらり歩いた。犬は私



についてきながら、みちみちお互いに喧嘩などはじめて、私は、  
 わぎと振りかえつて見もせず、知らぬふりして歩いているのだが、  
 内心、じつに閉口であつた。ピストルでもあつたなら、  
ちゆうちよ  
 躊躇  
 せずドカンドカンと射殺してしまいたい気持であつた。犬は、私  
 にそのような、  
げめんによほさつ  
 外面如菩薩、  
ないしんによやしや  
 内心如夜叉的の奸佞かんねいの害心があるとも知らず、どこまでもついてくる。練兵場をぐるりと一廻りして、私はやはり犬に慕われながら帰途についた。家へ帰りつくまでには、背後の犬もどこかへ雲散霧消うんさんむしやうしているのが、これまででの、しきたりであつたのだが、その日に限つて、ひどく執し拗つようで馴れ馴れなしいのが一匹いた。真黒の、見るかげもない小犬である。ずいぶん小さい。胴の長さ五寸の感じである。けれども、

小さいからといって油断はできない。齒は、すでにちやんと生えそろつているはずである。噛まれたら病院に三、七、二十一日間通わなければならぬ。それにこのような幼少なものには常識がないから、したがって気まぐれである。いつそう用心をしなければならぬ。小犬は後になり、さきになり、私の顔を振り仰ぎ、よたよた走つて、とうとう私の家の玄関まで、ついてきた。

「おい。へんなものが、ついてきたよ」

「おや、可愛い」

「可愛いもんか。追つ払つてくれ、手荒くすると喰いつくぜ、お菓子でもやって」

れいの軟弱外交である。小犬は、たちまち私の内心畏怖の情を

見抜き、それにつけこみ、ずうずうしくもそれから、ずるずる私の家に住みこんでしまった。そうしてこの犬は、三月、四月、五月、六、七、八、そろそろ秋風吹きはじめてきた現在にいたるまで、私の家にいるのである。私は、この犬には、幾度泣かされたかわからない。どうにも始末ができないのである。私はしかたなく、この犬を、ポチなどと呼んでいるのであるが、半年もともに住んでいながら、いまだに私は、このポチを、一家のものとは思えない。他人の気がするのである。しつくりゆかない。不和である。お互い心理の読みあいには火花を散らして戦っている。そうしてお互い、どうしても釈しやく然ぜんと笑いあうことができないのである。

はじめこの家にやってきたころは、まだ子供で、地べたの蟻ありを不審そうに観察したり、蝦蟇がまを恐れて悲鳴を挙げたり、その様には私も思わず失笑することがあつて、憎いやつであるが、これも神様の御心によつてこの家へ迷いこんでくることになったのかもしれぬと、縁の下に寢床を作つてやつたし、食い物も乳幼児むきに軟らかく煮て与えてやつたし、蚤取粉のみとりこなどからだに振りかけてやつたものだ。けれども、ひとつき経つと、もういけない。そろそろ駄犬の本領を發揮してきた。いやしい。もともと、この犬は練兵場の隅に捨てられてあつたものにちがいない。私のあの散歩の帰途、私にまつわりつくようにしてついてきて、その時は、見るかげもなく瘦やせこけて、毛も抜けていてお尻の部分は、ほと

んど全部禿<sup>は</sup>げていた。私だからこそ、これに菓子を与え、おかゆを作り、荒い言葉一つかけるではなし、腫<sup>は</sup>れものにさわるようにていちょう鄭重にもてなしてあげたのだ。ほかの人だったら、足蹴<sup>あしげ</sup>にして追い散らしてしまったにちがいない。私のそんな親切なもてなしも、内実は、犬に対する愛情からではなく、犬に対する先天的な憎悪と恐怖から発した老<sup>ろう</sup>獠<sup>かい</sup>な駈<sup>か</sup>け引きにすぎないのであるが、けれども私のおかげで、このポチは、毛並もとのいい、どうやら一人まえの男の犬に成長することを得たのではないか。私は恩を売る気はもうとうないけれども、少しは私たちにも何か楽しみを与えてくれてもよさそうに思われるのであるが、やはり捨犬はだめなものである。大めし食って、食後の運動のつもりであろうか、

下駄をおもちやにして無残に噛み破り、庭に干してある洗濯物を、  
要らぬ世話して引きずりおろし、泥まみれにする。

「こういう冗談はしないでおくれ。じつに、困るのだ。誰が君に、  
こんなことをしてくれとたのみましたか？」

と、私は、内に針を含んだ言葉を、精いっぱい優しく、いや味を  
きかせて言つてやることもあるのだが、犬は、きよろりと眼を動  
かし、いや味を言い聞かせている当の私にじやれかかる。なんと  
いう甘つたれた精神であろう。私はこの犬の鉄面皮てつめんぴには、ひそ  
かに呆れあき、これを軽蔑さえしたのである。長ずるに及んで、いよ  
いよこの犬の無能が暴露された。だいいち、形がよくない。幼少  
のころには、もう少し形の均斉もとれていて、あるいは優れた血が

雑まじっているのかもしれないと思わせるところあつたのであるが、それは真赤ないつわりであつた。胴だけが、によきによき長く伸びて、手足がいちじるしく短い。亀のようである。見られたものでなかつた。そのような醜い形をして、私が外出すればかならず影のごとくちやんと私につき従い、少年少女までが、やあ、へんてこな犬じやと指さして笑うこともあり、多少見栄坊みえぼうの私は、いくらすまして歩いてても、なんにもならなくなるのである。いつそ他人のふりをしようとする早足に歩いてみても、ポチは私の傍を離れず、私の顔を振り仰ぎ振り仰ぎ、あとになり、さきになり、からみつくようにしてついてくるのだから、どうしたって二人は他人のようには見えまい。気心の合つた主従としか見えまい。おかげで私

は外出のたびごとに、ずいぶん暗い憂鬱な気持にさせられた。いい修行になったのである。ただ、そうして、ついて歩いていたころは、まだよかった。そのうちにいよいよ隠してあつた猛獣の本性を暴露してきた。喧嘩格闘を好むようになったのである。私のお伴をして、まちを歩いて行きあう犬、行きあう犬、すべてに挨拶して通るのである。つまりかたっぱしから喧嘩して通るのである。ポチは足も短く、若年でありながら、喧嘩は相当強いようである。空地の犬の巢に踏みこんで、一時に五匹の犬を相手に戦つたときはさすがに危く見えたが、それでも巧みに身をかわして難を避けた。非常な自信をもつて、どんな犬にでも飛びかかつてゆく。たまには勢いきおいま負まけして、吠えながらじりじり退却すること



もある。声が悲鳴に近くなり、真黒い顔が蒼黒あおくなってくる。いちど小牛のようなシエパードに飛びかかって行って、あのときは、私が蒼くなつた。はたして、ひとたまりもなかつた。前足でころころポチをおもちやにして、本気につきあつてくれなかつたので、ポチも命が助かつた。犬は、いちどあんなひどいめに逢うと、大へん意気地がなくなるものらしい。ポチは、それからは眼に見えて、喧嘩を避けるようになった。それに私は、喧嘩を好まず、否、好まぬどころではない、往来で野獣の組打ちを放置し許容しているなどは、文明国の恥辱と信じているので、かの耳を聳ろうせんばかりのけんけんごうごう、きやんきやんの犬の野蛮やばんのわめき声には、殺してもなおあき足らない憤怒と憎悪を感じているのである。私

はポチを愛してはいない。恐れ、憎んでこそいるが、みじんも愛しては、いない。死んでくれたらいいと思つている。私にのこのこついてきて、何かそれが飼われているものの義務とでも思つているのか、途中で逢う犬、逢う犬、かならず凄<sup>せいさん</sup>惨に吠えあつて、主人としての私は、そのときどんなに恐怖にわななき震えていることか。自動車呼びとめて、それに乗つてドアをばたんと閉じ、一目散に逃げ去りたい気持なのである。犬同士の組打ちで終るべきものなら、まだしも、もし敵の犬が血迷つて、ポチの主人の私に飛びかかってくるようなことがあつたら、どうする。ないとは言わせぬ。血に飢えたる猛獣である。何をするか、わかつたものでない。私はむごたらしく噛み裂かれ、三、七、二十一日間病院

に通わなければならぬ。犬の喧嘩は、地獄である。私は、機会あるごとにポチに言い聞かせた。

「喧嘩しては、いけないよ。喧嘩するなら、僕からはるか離れたところで、してもらいたい。僕は、おまえを好いてはいないんだ」

少し、ポチにもわかるらしいのである。そう言われると多少しよげる。いよいよ私は犬を、薄気味わるいものにした。その私の繰り返し繰り返し言った忠告が効を奏したのか、あるいは、かのシエパードとの一戦にぶざまな惨敗さんばいを喫きつしたせいか、ポチは、卑屈ひくつなほど柔弱にゆうじやくな態度をとりはじめた。私といっしょに路を歩いて、他の犬がポチに吠えかけると、ポチは、

「ああ、いやだ、いやだ。野蛮ですねえ」

と言わんばかり、ひたすら私の気に入られようと上品ぶって、ぶるつと胴震いさせたり、相手の犬を、しかたのないやつだね、とさもさも憐れむように流し目で見て、そうして、私の顔色を伺い、へっへっへっへと卑しい追ついで従しよう笑いするかのごとく、その様子はいやらしいと思ったらなかつた。

「一つも、いいところないじゃないか、こいつは。ひとの顔色ばかり伺っていていやがる」

「あなたが、あまり、へんにかまうからですよ」家内は、はじめからポチに無関心であつた。洗濯物など汚されたときはぶつぶつ言うが、あとはけろりとして、ポチポチと呼んで、めしを食わせたりなどしている。「性格が破産しちやつたんじゃないかしら」

と笑っている。

「飼い主に、似てきたというわけかね」私は、いよいよ、にがにがしく思った。

七月にはいって、異変が起った。私たちは、やっと、東京の三鷹村たかむらに、建築最中の小さい家を見つけることができて、その完成ししだい、一か月二十四円で貸してもらえるように、家主と契約の証書交して、そろそろ移転の仕度をはじめた。家ができると、家主から速達で通知が来ることになっていたのである。ポチは、もちろん、捨ててゆかれることになっていたのである。「連れていったって、いいのに」家内は、やはりポチをあまり問題にしていない。どちらでもいいのである。

「だめだ。僕は、可愛いから養っているんじゃないんだよ。犬に復讐されるのが、こわいから、しかたなくそつとしておいてやっているのだ。わからんかね」

「でも、ちよつとポチが見えなくなると、ポチはどこへ行つたらう、どこへ行つたらう、と大騒ぎじゃないの」

「いなくなると、いつそう薄気味が悪いからさ、僕に隠れて、ひそかに同志を糾きゆうこう合ごうしているのかもわからない。あいつは、僕に軽蔑されていることを知っているんだ。復讐心が強いそうだからなあ、犬は」

いまこそ絶好の機会であると思っていた。この犬をこのまま忘れたふりして、ここへ置いて、さっさと汽車に乗って東京へ行つ

てしまえば、まさか犬も、ささごとうげ 笹子峠を越えて三鷹村まで追いかけてくることはなからう。私たちは、ポチを捨てたのではない。まったくうっかりして連れてゆくことを忘れたのである。罪にはならない。またポチに恨まれる筋合もない。復讐されるわけではない。「だいじょうぶだろうね。置いていっても、飢え死するようなことはないだろうね。死霊たの祟りということもあるからね」

「もともと、捨犬だったんですもの」家内も、少し不安になった様子である。

「そうだね。飢え死することはないだろう。なんとか、うまくやってゆくだろう。あんな犬、東京へ連れていったんじゃ、僕は友人に対して恥ずかしいんだ。胴が長すぎる。みつともないねえ」

ポチは、やはり置いてゆかれることに、確定した。すると、ここに異変が起つた。ポチが、皮膚病にやられちやつた。これが、またひどいのである。さすがに形容をはばかりが、さんじょう惨状、眼をそむけしむるものがあつたのである。おりからの炎熱とともに、ただならぬ悪臭を放つようになった。こんどは家内が、まいってしまつた。

「ご近所にわるいわ。殺してください」女は、こうなると男よりも冷酷で、度胸がいい。

「殺すのか」私は、ぎよつとした。「もう少しの我慢じゃないか」私たちは、三鷹の家主からの速達を一心に待っていた。七月末には、できるでしょうという家主の言葉であつたのだが、七月も



そろそろおしまいになりかけて、きょうか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつて待機していたのであつたが、なかなか、通知が来ないのである。問いあわせの手紙を出したりなどしている時に、ポチの皮膚病がはじまつたのである。見れば、見るほど、酸鼻さんびの極である。ポチも、いまはさすがに、おのれの醜い姿を恥じている様子で、とかく暗闇の場所を好むようになり、たまに玄関の日当りのいい敷石の上で、ぐったり寝そべっていることがあつても、私が、それを見つけて、

「わあ、ひでえなあ」と罵倒ばとうすると、いそいで立ち上つて首を垂れ、閉口したようにこそこそ縁の下にもぐりこんでしまうのである。

それでも私が外出するときには、どこからともなく足音忍ばせて出てきて、私についてこようとする。こんな化け物みたいなものには、ついてこられて、たまるものか、とその都度、私は、だまってポチを見つめてやる。あざけりの笑いを口角にまざまざと浮べて、なんぼでも、ポチを見つめてやる。これは大へんききめがあつた。ポチは、おのれの醜い姿にハツと思ひ当る様子で、首を垂れ、しおしおどこかへ姿を隠す。

「とつても、我慢ができないの。私まで、むず痒がゆくなつて」家内は、ときどき私に相談する。「なるべく見ないように努めているんだけど、いちど見ちやつたら、もうだめね。夢の中にまで出てくるんだもの」

「まあ、もうすこしの我慢だ」がまんするよりほかはないと思つた。たとえ病んでいるとはいつても、相手は一種の猛獣である。下手に触ったら噛みつかれる。「明日にでも、三鷹から、返事が来るだろう、引越してしまつたら、それつきりじゃないか」

三鷹の家主から返事が来た。読んで、がっかりした。雨が降りつづいて壁が乾かず、また人手も不足で完成までには、もう十日くらいかかる見こみ、というのであつた。うんざりした。ポチから逃れるためだけでも、早く、引越してしまいたかつたのだ。私は、へんな焦躁感で、仕事も手につかず、雑誌を読んだり、酒を呑んだりした。ポチの皮膚病は一日一日ひどくなつていつて、私の皮膚も、なんだか、しきりに痒くなつてきた。深夜、戸外でポ

チが、ばたばたばた痒さに身悶えしている物音に、幾度ぞつとさせられたかわからない。たまらない気がした。いつそひと思いにと、狂暴な発作に駆かられることも、しばしばあった。家主からは、さらに二十日待て、と手紙が来て、私のごちやごちやの忿懣ふんまんが、たちまち手近のポチに結びついて、こいつあるがために、このように諸事円滑えんかつにすすまないのだ、と何もかも悪いことは皆、ポチのせいみたいを考えられ、奇妙にポチを呪咀じゆそし、ある夜、私の寝巻に犬の蚤のみが伝播でんぱされてあることを発見するに及んで、ついにそれまで堪えに堪えてきた怒りが爆発し、私はひそかに重大の決意をした。

殺そうと思ったのである。相手は恐るべき猛獣である。常の私

だったら、こんな乱暴な決意は、逆立ちしたつてなしえなかつたところのものなのであつたが、盆地特有の酷暑こくしよで、少しへんになつていた矢先であつたし、また、毎日、何もせず、ただぽかんと家主からの速達を待つていて、死ぬほど退屈な日々を送つて、むしやくしやいらいら、おまけに不眠も手伝つて発狂状態であつたのだから、たまらない。その犬の蚤を発見した夜、ただちに家内をして牛肉の大片を買いに走らせ、私は、薬屋に行きある種の薬品を少量、買い求めた。これで用意はできた。家内は少なからず興奮していた。私たち鬼夫婦は、その夜、鳩きゆうしゆ首して小声で相談した。

翌あくる朝、四時に私は起きた。目覚時計を掛けておいたのである

が、その鳴りださぬうちに、眼が覚めてしまった。しらじらと明けていた。肌寒いほどであった。私は竹の皮包をさげて外へ出た。

「おしまいまで見ていないですぐお帰りになるといいわ」家内は玄関の式台に立って見送り、落ち着いていた。

「心得ている。ポチ、来い！」

ポチは尾を振って縁の下から出てきた。

「来い、来い！」私は、さっさと歩きだした。きようは、あんな、意地悪くポチの姿を見つめるようなことはしないので、ポチも自身の醜さを忘れて、いそいそ私についてきた。霧が深い。まちはひっそり眠っている。私は、練兵場へいそいだ。途中、おそろし

く大きい赤毛の犬が、ポチに向つて猛烈に吠えたてた。ポチは、  
 れいによつて上品ぶつた態度を示し、何を騒いでいるのかね、と  
 でも言いたげな蔑視べっしをちらとその赤毛の犬にくれただけで、さつ  
 さとその面前を通過した。赤毛は、卑劣ひれつである。無法にもポチの  
 背後から、風のごとく襲いかかり、ポチの寒しげな鞆こうがん丸をねら  
 った。ポチは、咄嗟とっさにくるりと向きなおつたが、ちよつと躡ちゆうち  
 躡よし、私の顔色をそつと伺つた。

「やれ！」私は大声で命令した。「赤毛は卑怯だ！ 思う存分や  
 れ！」

ゆるしが出たのでポチは、ぶるんと一つ大きく胴震いして、弾  
 丸のごとく赤犬のふところに飛びこんだ。たちまち、けんけんご

うごう、二匹は一つの手毬てまりみたいになつて、格闘した。赤毛は、ポチの倍ほども大きいずうたい凶体をしていたが、だめであつた。ほどなく、きやんきやん悲鳴を挙げて敗退した。おまけにポチの皮膚病までうつされたかもわからない。ばかなやつだ。

喧嘩が終つて、私は、ほつとした。文字どおり手に汗して眺めていたのである。一時は二匹の犬の格闘に巻きこまれて、私のもとに死ぬるような気さえしていた。おれは噛み殺されたつていいんだ。ポチよ、思う存分、喧嘩をしろ！ と異様に力んでいたのであつた。ポチは、逃げてゆく赤毛を少し追いかけて、立ちどまつて、私の顔色をちらと伺い、きゆうにしよげて、首を垂れすごすご私のほうへ引返してきた。



「よし！ 強いぞ」ほめてやって私は歩きだし、橋をかたかた渡つて、ここはもう練兵場である。

むかしポチは、この練兵場に捨てられた。だからいま、また、この練兵場へ帰ってきたのだ。おまえのふるさとで死ぬがよい。

私は立ちどまり、ぼとりと牛肉の大片を私の足もとへ落として、「ポチ、食え」私はポチを見たくなかった。ぼんやりそこに立つたまま、「ポチ、食え」足もとで、ぺちやぺちや食べている音がする。一分たたぬうちに死ぬはずだ。

私は猫背ねこぜになつて、のろのろ歩いた。霧が深い。ほんのちかくの山が、ぼんやり黒く見えるだけだ。南アルプス連峰も、富士山も、何も見えない。朝露で、下駄がびしょぬれである。私はいつ

そうひどい猫背になって、のろのろ帰途についた。橋を渡り、中学校のまえまで来て、振り向くとポチが、ちゃんといった。面目なげに、首を垂れ、私の視線をそつとそらした。

私も、もう大人である。いたずらな感傷はなかった。すぐ事態を察知した。薬品が効かなかったのだ。うなずいて、もうすでに私は、白紙還元である。家へ帰って、

「だめだよ。薬が効かないのだ。ゆるしてやろうよ。あいつには、罪がなかったんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だったはずなんだ」私は、途中で考えてきたことをそのまま言ってみた。

「弱者の友なんだ。芸術家にとって、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れていた。僕だけじゃな

い。みんなが、忘れてるんだ。僕は、ポチを東京へ連れてゆこうと思うよ。友がもしポチのかつこう恰好を笑ったら、ぶん殴なぐってやる。卵あるかい？」

「ええ」家内は、浮かぬ顔をしていた。

「ポチにやれ、二つあるなら、二つやれ。おまえも我慢しろ。皮膚病なんてのは、すぐなおるよ」

「ええ」家内は、やはり浮かぬ顔をしていた。



# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」0 太宰治集」集英社

1972（昭和47）年3月初版

初出：「文学者」

1939（昭和14）年8月

入力：網迫

校正：田尻幹二

1999年4月12日公開

2009年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 畜犬談

—伊馬鶉平君に与える—

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>